

## [38] アレッサンドラ・フェリが踊るマノン

### ≡ 輝くばかりの悪徳 ≡

1996年8月2日 東京新聞 夕刊

七月上旬に来日したアメリカン・バレエ・シアターの『マノン』は、十八世紀フランスの小説『マノン・レスコー』が原作である。

美少女マノンに一目惚れし、学業を放り出して彼女と暮らすデ・グリユーが貞操観念のない女（じつに現代的！）への愛を断ち切れずに転落していく。

波乱にみちた物語に加えて、背景も賑やかな街中から閑静な愛の巢、あやしげな売春宿、流刑地アメリカの荒野と多様で、舞台や映画にはうってつけだ。

バレエ化されたのもこれが最初ではない。すでに一八三〇年にパリ・オペラ座でオーミュールという振付家によってバレエ化された記録があるが、しかしそれがどんな舞台だったか私たちには知るよしもない。ライト・モチーフを使った音楽で、装置も振付も出来が良かったと書物にあるが、トウシューズが一般化する前のことで、時代の波間に消えたのだろう。バレエ作品を記録に残すのは至難だった。

今回の『マノン』は一九七四年にイギリスのマクミランが振り付けたものである。彼の愛弟子だったアレッサンドラ・フェリが、弓なりの足の甲と見事な脚線を見せて、めくるめく動きも鮮やかにマノンを演じた。

## [38] アレッサンドラ・フエリが踊るマノン

### ≡ 輝くばかりの悪徳 ≡

1996年8月2日 東京新聞 夕刊

人間がこんなにも華麗に、こんなにも大胆かつ繊細に動くことができるものなのかと、最近のバレエを見ると驚くばかりである。三十年前にはとてもできなかったことをしているような気がするのだが、しかし百年前も二百年前も、人々はバレエを見て同じように感嘆したらしい。作品は消えても、感嘆したという記録だけは残っているのだ。

舞台の美しい姿に眼を奪われながら、しかし、マノンがこんなにきれいに見えていいのだろうかとは考えていた。もちろん荒野に果てる最期まで男の情熱をかきたててやまないマノンなのだから、美しいにはちがいないのだが、その裏にあるべき背徳の匂いや絶望の陰りが、踊る肉体からはまったく感じられない。

それというのもこの小説は、作者のアベ（僧院長）という肩書が示すとおり、キリスト教的な道徳観が背後にある作品だからである。アベ・プレヴォは修道院と軍隊を歩き来しながら自身ずいぶん放蕩を重ねた人で、『マノン・レスコー』も多分に自伝的なものをふくんでいるらしい。とすれば並の宗教説話として読むこともできないのだが、しかし宗教上の著作と同時進行で書かれたこの小説から倫理的な観点を完全に抜き去るわけにはいかない。その観点が、

## [38] アレッサンドラ・フェリが踊るマノン

### ≡ 輝くばかりの悪徳 ≡

1996年8月2日 東京新聞 夕刊

バレエでは見えてこないのである。

プレヴォもずいぶん破天荒だが、そもそもフランスの十八世紀がかなり混乱している時代であることは確かだ。大革命を前に、過去の秩序を否定しつつ人々は未来に途方もないヴィジョンを描いている。美徳の束縛と欲求の解放のはざままで、大言壮語しながら暗中模索している時代だと言ったらいいか。

文学の世界でも、高貴な文体で『悪徳の栄え』を書いたサドや、卓抜な教育論『エミール』を書きながら自分のこどもはみな孤児院に入れていたルソー、『危険な関係』という不道德きわまるポルノを書いた模範的愛妻家のラクロなど、言うこととすることとが不似合いで、そこがまたこの時代の面白さでもある。

そういう時代のもを二十世紀のバレエにするのだから、原作に重みを与えていた倫理の束縛が感じられなくても当然かもしれない。幕が進むにつれて、マノンの衣装は薄くなり裂けていく。それは悪徳と破滅のしるしのはずなのだが、しかしフェリのダンサーとしての肉体はそれによってじゃまものを捨て、ますます輝きわたるのである。それが二十世紀末の美徳、そしてダンスの正義なのだ。

ふりかえって現代は、これほど軽装に解放された

## [38] アレッサンドラ・フエリが踊るマノン

### ≡ 輝くばかりの悪徳 ≡

1996年8月2日 東京新聞 夕刊

時代のように見えて、やはり私たちは理不尽な旧弊にしぼられ、日々もがいてもいる。そんな現代の芸術表現は、百年、二百年後にいったいどのように受けとられるのだろうか。

#### 追記

身体で醜いもの、鬱屈したものを表現する舞踊、たとえば舞踏とかマッツ・エックの作品が出現する必然性は、ひとつには、過去のダンスがただ美しいだけだったことへの反動、もしくは疑問かもしれない。  
(二〇一六年六月)